
神騎士が異世界を謳歌する

幸有

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神騎士が異世界を謳歌する

【Nコード】

N8095L

【作者名】

幸有

【あらすじ】

MMOのゲームをやっていた主人公がゲームの中に飲み込まれそれでも前向きに冒険を続けていく。
引きこもりだった青年は異世界でどのように変わっていきけるのか。

主人公最強ものです。

プロローグ

神騎士が異世界を謳歌する

プロローグ

いつも通りパソコンの前に座り、俺はゲームをプレイしている。
俺のお気に入りのゲームの名前は「ロストグロリー」

ゲーム内容は世界中に散らばる秘石と呼ばれる魔法石を集めるため世界中を旅をするゲームだ。

秘石を手に入れると封印されている様々な魔法を使えるようになる。剣や杖、鎧、盾などに秘石を埋め込むことができ、装備を強化することもできるのだ。秘石にはランクがあつてE〜SSSまでありSSSランクの秘石ともなると、マーケットでの取引価格は5億ジュエル以上にもなる。

自慢じゃないが俺はこのゲームのために仕事を変えた。今はほぼ二トみたいなもんだ。収入は月々ぎりぎり生活できる程度の稼ぎしかない。でもいいんだ。版の頃から毎日10時間以上「ロストグロリー」に費やしていたお陰で、とうとう念願の『ゴッドスナイト神騎士』に転職することができるのだ。

騎士のLVを255まで上げ、更に条件を満たすと転職が可能ナイトなジヨブなのだが、この条件がとんでもなく厳しいため今まで誰も神騎士になつたものはいない。

ちなみに騎士は兵士の上級派生職でLVが60を超えると神殿で転職ができる。神騎士になる為の条件とは特殊な鎧、兜、靴、盾、手甲、剣を揃える事なのだが、これらを揃えるのはかなりの時間と手間が懸かる。

何故なら各装備を練成する毎にSSSランクの秘石が必要になるか

らだ。最低でも6個のSSSランクの秘石を集めないと装備を練成することができない。しかもSSSランクの秘石であれば何でもいいわけではない、それぞれ異なる6属性の秘石を手に入れなければならないのだ。

このゲームの魔法属性は大きく分けて6種類あり、火、水、土、風、光、闇がある。他にも召喚魔法や時空間魔法などもあるのだが、これらは特殊魔法に分類される。魔法は魔力によって威力に差が出るのだが、基本的にどのジョブでも使用することはできる。ただし魔力のステータスが低い職業の場合、魔法は使用できるが効果が低い。

騎士はほぼオールマイティなジョブで特化した技能がない代わりに物理攻撃も魔法攻撃もそこそこ使えるジョブだ。騎士からの上級派生職にはマジックナイト魔法騎士やウォーリアーナイト戦騎士サモンズナイト召喚騎士などがある。それぞれのジョブに転職すると特化した技能が与えられ、ステータスがジョブによって特化していく。

はつきり言って俺も何度も魔法騎士に転職しようとおもったかわからない。神騎士を目指して秘石を集めている間、当然Aランクの秘石やSランクの秘石も手に入る訳で、すべて魔法を覚えるために使用したり、既に魔法を覚えている秘石については売り払ってSSSランクの秘石を買うための資金にした。

お陰で魔法騎士でもないのにあらゆる属性の魔法は覚えてしまった。ただ属性ごとの極大魔法はSSSランクの秘石を使用しない限り覚える事はできないため、1つも覚えていない。SSSランクの秘石のドロップ確立は悪すぎると思う。龍種の中でも最強のマスタードラゴン不倒しないとドロップしない上に、そのドロップ確率は正確な数字は定かではないが1万分の1とも言われている。しかもLV

100以上の最上級職のパーティを6人で組んでも負ける事もあるのだ。俺も何度死んだかわからない。

結局これまでにSSSランクの秘石は自力では2つしかドロップしなかったため、マーケットのオークションやアイテムトレードでも2つは手に入れた。アイテムトレードではやつとの思いで手に入れたSSランクの秘石20個とトレードした。オークションでは値段が吊り上がり7億ジュエルも払った。お陰で俺の手持ちの資産は一時ほぼ無いに等しい状態だった。

LVなんかとつくの昔に255だ。騎士の最高LVが255である為、これ以上LVは上がらない。ちなみに騎士の上級派生職の最高LVは511。しかし魔法騎士や戦騎士でLVが200を超えている人を俺は見たことがなかった。最上級職になるとLVが上がり辛くなるためだ。それこそLV100の最上級職の場合、マスタードラゴンを10体程倒さないとLVは上がらないらしい。

本来はLV100で魔法騎士や戦騎士に転職でき、転職をするとLVが1に戻る為、ジョブが騎士のままLV255になっている者はなかなかいないのだ。しかも騎士には特化ステータスないため、LVが255あっても魔法攻撃力はLV100の魔法騎士に劣る。物理攻撃も同様でLV100の戦騎士より弱い。であるため神騎士になろうとする者は大抵途中で挫折して魔法騎士などに転職してしまうのだ。

俺が転職せずに騎士のままLVを上げる事が出来たのは、割と早い段階で二つのSSSランクの秘石を運よく手に入れることが出来たためだと思う。しかもその秘石は光と闇の秘石でそれぞれ剣と鎧に練成できる秘石だったため、手っ取り早く高い攻撃力と防御力を手に入れる事が出来たからだ。

もしSSSランクの秘石を2つ、早い段階で手に入れていなかったら、俺は神騎士を目指していなかったと思う。

SSSランクの光の秘石はずっと一緒に【ロストグローリー】をプレイしてきた廃人仲間から貰った。そいつもニートの様な生活をしていたらしいのだが、実世界で父が倒れたため家業を継ぐことになりゲームなどやってる場合ではなくなってしまうらしい。

俺よりも廃人仕様だった彼は当時魔法騎士でLVが100を超えていたため、全ての装備やアイテムなどを

売り払うと30億ジュエル近い資産になった。彼はゲームから完全に足を洗うため、その資産でSSSランクの光の秘石をオークションで手に入れ俺に譲ってくれた。そしてそれ以降このゲームには二度とログインしていないようだ。リアルでは数力月に一度連絡をするのだが、とにかく忙しくてそれどころではないらしい。彼はリアルで必死なのだ。

闇の秘石は初めてのマスタードラゴンとの戦いでドロップした。当時まだLV130ほどで転職するかどうか悩んでいたのだが、偶々パーティに誘われ初めて倒したマスタードラゴンからSSSランクの闇の秘石をドロップしたのだ。パーティでの戦闘ではドロップしたアイテムは各々に自動でランダムに配分されるのだが、その時は運よく俺に配分された。ランダムで配分されたアイテムは配分された者の所有となるルールのパーティだった為、俺は皆にお礼を言い申し訳ないとは思いながらも有り難く闇の秘石を手に入れたにだ。

LV130程度の騎士がSSSランクの秘石を2つも所有していることはとても稀だったと思う。しかも闇と光の秘石である。俺は決意して神騎士を目指すことに決め、光の秘石を 神剣 天羽々斬^{あめのはばきり} に練成し、闇の秘石を 神鎧 布都御魂^{ふつのみたま} に練成した。

これは後々にわかったことなのだがSSSランクの秘石の中でも光と闇の秘石は特にドロップ率が悪いらしく、その確率は他の属性の

SSSランク秘石の20分の1程度なのだから。もしそれを知っていたら俺は光と闇の極大魔法を覚える事を選び、魔法騎士になっていたかもしれない。

しかしこの2つの装備のお陰で自分のLV帯よりも少し高い、しかも最上級職のプレイヤーと一緒にパーティを組めたことは間違いない。最上級職と比べ元々のステータスが低い騎士のままではいくらLVが高くて普通であればマスタードラゴンを倒すためのパーティに入ることなどできないのだ。それこそ瞬殺されてしまうし攻撃も通らない。

さすがにSSSランク秘石から練成した神の名を持つ装備はそこらのレア装備とはわけが違う。

マスタードラゴンを倒し続けて俺のLVが200を超えたころ、3つ目のSSSランクである火の秘石を手に入れた。一緒にパーティを組んでいた炎術魔導士に5億ジュエルで売って貰えないかと頼まれたが、それを断って 神兜 火迦具土ほのかぐち に練成した。火迦具土は物理防御力もさることながら火の魔法に対する魔法防御力が跳ね上がる為、炎のブレスを吐いてくるマスタードラゴンに対してはとて有効だった。

アイテムトレードで手に入れたSSSランクの風の秘石は 神靴 志那都比古しなつひこ を練成することができた。これも風の魔法に対する防御力が跳ね上がる。更に特殊効果として移動速度と俊敏のステータスが上がったのは嬉しかった。

オークションで大枚を叩いて買った土の秘石では 神甲 埴安神はにやがみ が練成された。これは防具であるにも拘らず攻撃力の上昇するのが嬉しかった。当然土属性の魔法に対してもかなりの効力を持っている。

そしてとうとう俺は最後のSSSランク、水の秘石を手に入れる事が出来た。かれこれLVが255になってからリアルで2年ほどの月日が経っていた。思えば長い道のりだった。何度も挫折しかけ【ロストグローリー】の中でも俺自身かなり有名になっていた。最高LVの騎士などそうそういないうえに、大真面目に『神騎士』を目指しているものなど俺の他には皆無だったからだ。その頃になると神の名を持つ装備の恩恵もあり、マスタードラゴンをかなり苦戦しながらではあるが、なんとかソロで狩ることもできていた。水の秘石はソロで狩ったマスタードラゴンからドロップしたものだ。俺が【ロストグローリー】をプレイを始めてから既に5年程経過している。ギルドにもずっと騎士のままにいる負い目から入ることができずにいた為、フレンドは沢山いたがずっと一匹狼だった。そのため臨時パーティーにしか入ることが出来ず、フレンドがギルドに入ってしまうとパーティーの誘いが来なくなるなんてこともざらにあった。

そうこう考えているとなんだか感慨深くなってしまい、俺はパソコンの画面の前で不覚にも泣きそうになったのをグツと堪え、SSSランクの水の秘石で盾を練成する。練成された盾は 神盾 罔象女^{のみずは}神。罔象女神の特殊効果はHP自動回復だ。1分間に10%のHPがMPを使用せずに自動回復する。水の魔法に対する魔法防御力もかなり高い。

神の名を持つ装備を全身に纏い俺は転職すべく神殿に向かった。マウスを持つ手が震える。俺の5年間の結晶がこの転職なのだ。

『神騎士』

おそらく、というより間違いなく今までこの職に転職できた者はいない。ほとんどの者が淘汰され挫折し、5年という歳月をただこれ

1話

神騎士が異世界を謳歌する

1話

どうやら俺は気を失っていたようだ。気がつくとも周りが随分騒がしい。俺は自分の部屋にいたはずなのだが……と周りを見渡してみよう。どう見ても自分の部屋では無い。6畳のワンルームの部屋にいないはずの俺は何故か中世のヨーロッパのような雰囲気を持った恐らくは教会のような場所にいた。

片膝をついたまま何かに祈っているような格好だ。それよりも一番に違和感を感じたのは俺の身に付けているものだった。先程まで俺は間違いなく自分の部屋にいて、高校生の時から愛用しているジャージを着ているはずだった。だが今の俺の格好は鎧だ。ご丁寧に腰には剣まで佩いている。

前方を見上げると壇上には神父の様な恰好をしたおっさんがいた。おっさんは突然俺に向かって声をかけてくる。

「これであなたは コッデスナイト 神騎士 に転職しました。あなたの冒険者としての道に幸多からんことを祈ります。」

（はあ？何言ってるんだ？このおっさん。でも待てよ。さっきのセリフどっかで聞いたことがあるな。……って【ロストグローリー】じゃねえか？そういえば今の俺の格好も【ロストグローリー】で俺が使ってたキャラクターの『ミスト』か！俺もしかして異世界来ちゃった？ってことはここは神殿？）

俺は立ち上がってもう一度周りを見渡した。神官のおっさんと周

りには巫女らしき人がいる。たしかにここは俺がゲームでパソコンの画面から見ていた【ロストグローリー】の神殿と一致していた。振り向くと、ちらほら冒険者と思われる恰好をした人々も見える。

「うおお~~~~~やったぞ~~~~~!!!」

周りにいた人たちが一斉に振り向き俺の方を向くがそんなことは気にしない。俺は常日頃から思っていたのだ。現実がゲームの世界になって欲しいと。日々の生活がいっぱいっぴいな現実から抜け出したいとずっと思っていた。俺の願いは叶ったんだ。ここが俺の現実になったんだ。

そう考えると居ても経ってもいらなかった。

とりあえず神殿をあとにして街へと出てみる。やはりここは【ロストグローリー】の世界だ。街の人々やそこら中に歩いている冒険者達。どう考えてもドツキリにしてはスケールが大き過ぎる。なんせ神殿の前にはゲームの中と同じ様に大きな城があるのだ。まず日本ではあり得ない。

俺自身の格好もかなり変化していた。まず一つ目が長髪になっていた。顔はまだ鏡を見ていないので

判らないが、髪は間違はなく背中辺りまである。さらさらヘアード。少しだけ引つ張ってみるが確かに俺の頭から生えていた。断じてカツラなどではない。ちなみに前までの俺は、短髪でほぼ坊主のようにしていた。身長はあまり変わっていない様に思う。元々180?程あったため大きくも小さくもなっていないようだ。身体つきはかなりがっしりと筋肉質になっている。この体であれば多分力も相当強いだろう。こんな重そうな鎧を着ているのに殆ど重さを感じない。本来の自分であればこんな重そうな鎧なんか着ていたら動けないはずだ。

腰にはゲームと同じように魔法の子袋がぶら下がっていた。ゲーム

内の仕様ではここに持ち物が入っているはずだ。LVとステータスによってこの袋の中に入る量が変わり、手をつまみただけで中の持ち物が取り出せる便利な袋である。試しにMP回復剤を取り出してみたら問題なく取り出せた。この世界のお金であるジュエルも問題なく取り出すことができた。暫くの間は手持ちのジュエルだけで生活できるだろうから問題はないだろう。

ただ俺には明確な目的がなかった。生活するだけであれば当面のジュエルは持っているし、かといっていきなり冒険に出る訳にもいかない。ゲームと同じ世界とはいえ、さすがに命の危険を冒すような真似はしたく無いからだ。ゲームと全く同じであれば死ぬことはなく、死んでも神殿に転送されるだけのはずではあるが確証が無い。うちは何とも言えない。さすがに何も判らないうちからそれを試す勇氣はなかった。

とりあえず俺は街のほずれにある酒場に向かうことにした。やっぱりゲームでいろんな人の話を聞くのは酒場が定番だと考えたからだ。酒場までの道順は覚えているが、現実には初めて見る街並みをきよろきよろと眺めながら酒場へと向かった。

酒場は冒険者で溢れていた。ゲームの仕様でもこの酒場というのは重要な役割を持っており、所謂クエストと呼ばれる仕事を冒険者が受けるための施設でもあるからだ。きよろきよろとしながら酒場に入るなりお約束と言わんばかりに冒険者だと思われる酔っ払いが絡んできた。

「おゝ兄ちゃん。どこの田舎もんだ？見ない顔だがここはガキの来る場所じゃねえぞ？ガキは帰ってミルクでも飲んでな。」

酒臭い吐息を吐きながら一昔前の不良のような歩き方でこちらに向

かってくる。

「俺はガキと言われるほど若くもないんだがな。それよりも酒臭い息を吐きかけるんじゃないやねえ。胸糞悪い。」

つい言ってしまった。俺は元々不良の様な連中が大嫌いなのだ。それも自分より弱そうな相手を捕まえて喧嘩を売るような奴等が一番許せない。

「あ？喧嘩売ってんのか？俺が騎士のソルド様と知って言ってんだな？」

「そんなこと知るか！このハゲ！！」

言ってしまった。売り言葉に買い言葉とはまさにこのことだ。俺は前の世界でも頭に血が上ると余計な一言を言ってしまう、喧嘩になっってしまうこともしばしばあった。まさかこの世界に来てそれほど時間も経っていないのにこんな展開になるとは自分でも予想できなかった。

「てめえ！！表に出ろ！痛い目に合わねえとわからねえようだな。実力もないくせに口だけ粋がってる奴は捻りつぶしてやる！」

俺はかなり頭に血が上っていたが勝てるであろう心算はしていた。それは喧嘩売ってきた奴の装備を見れば一目瞭然であった。伊達に5年も【ロストグロリー】をやっていたわけではない。あの酔っ払いが装備しているのはLV50前後の兵士がよく装備しているプレートアーマーだ。騎士と言っていたが転職して

間もないのだろう。この世界で俺が知りうる限りの最強装備をして

いるのにあの程度の酔っ払いに負けるはずがないと考えていた。しかしそんなこと知らない酒場にいた周りの連中は、ざわついていた。

「やめといた方がいいぞ、兄さん。あいつはこの辺りじゃちよつとばかり名前の知られている冒険者だ。最近上級職の【騎士】になつたつてのも本当らしいぞ。」

とわざわざ忠告までしてくる奴もいた。先程俺に絡んでくる前に、あの酔っ払いが絡んでいた冒険者になつたばかりだと思われるかわいしい神官風の女の子にまで声を掛けられ、やめた方がいいですよ。と忠告された。しかし負ける要素がほとんど無いと考えていた俺はにこりと笑い、

「」忠告ありがとう。でも心配いらないますよ。」

と言いながら指をポキポキと鳴らしながら待ち構えている酔っ払いが待つ店の外に出た。

俺が外に出るとほぼ同時のタイミングで酔っ払いが腰に差していたブロードソードを抜き斬りかかってくる。しかし俺にとつて酔っ払いの動きはあまりにも遅い動きに感じた。俺も佩いていた剣を抜き酔っ払いの剣を弾くと酔っ払いのブロードソードは甲高い音キンつと言つ音を鳴らし真つ二つに折れてしまった。俺の剣には傷一つ付いていない。

そのまま俺は剣を酔っ払いに突き付けると先程まで赤かった酔っ払いの顔色は一気に青褪めた。

「まだやるか？」

と酔っ払いに問うと酔っ払いは激しく首を振り、俺が剣を鞘にしま

2話

神騎士が異世界を謳歌する

2話

酒場の中に戻ると周りはざわついていて、聞き耳を立てて周りの人々の話を聞いてみると、どうやら先ほど逃げて行った酔っ払いは、この辺りではそれなりに強い冒険者だったようだ。

酒場のマスターである胸元の開いた際どい服に身を包んだおねーさんにも話を聞いたが、この辺りでは兵士から騎士に転職出来る程のLVである冒険者はあまりいらしないのだ。この地域の魔獣は弱いため力のある冒険者は相応の魔獣のいる地域に行ってしまう為らしい。ゲームの設定でも今俺がいるこの城下街　フィストア　は始まりの街であるため、当然町周辺の魔獣も弱い。それゆえに戦闘力を持たない冒険者以外の者はこの街に多く集まるため、それがこの街を大きくしている要因の一つであるようなのだ。実際ゲームの中でもこの大陸で一番大きな街であるとされ、この街のマーケットや露天などはいつもプレイヤーで賑わっていた。

とりあえず俺は『神騎士』になってから自分のステータスを確認していないため、ステータスの確認方法が知りたかった。先程は安易に喧嘩を買ったが、実は不安要素も俺の中にはあったのだ。それは転職したばかりである俺のLVは1になっている筈だからだ。幸い装備にLV制限が無いのでこの装備をしている限りそうそう俺に敵うものはいないとは思ってはいたがステータスはLV1なのである。

実際この世界で自分のステータスを確認する方法を俺はまだ知らない。

い。もしかしたらそういつた類のものは無いのかもしれない。ただLVだけは酒場で確認できることをマスターのおねーさんから先程教えて貰った。酒場にはスフィアと呼ばれている魔法の水晶球が必ず置いてあり、LVが満たない場合はクエストを受ける事が出来ない様にするためクエスト受注の際には必ずLVを確認するからだ。ただしLV以外にも冒険者ランクというものが存在し、これもEからSSSまで存在する。冒険者ランクが高ければ、LVに関係なくクエストを受ける事が出来るらしい。ちなみに兵士の場合はEランクからスタートして実績を残せばBランクまで上げることが出来る。騎士に転職した場合はCランクからスタートとなり、最上級職の場合には初めから無条件でSランクとなる。

俺は最上級職であるためSランクだ。

マスターにお願いしてスフィアでLVを確認させて貰ったのだが、予想通りLVは1だった。俺がLV1だと言うことにマスターは驚いていたがジョブは神騎士だと言うと納得してもらえた様だった。しかし神騎士というジョブは冒険者にもあまり知られていないようである。この辺りの地域では魔法騎士や戦騎士ですらかなり珍しいため、実際にはマスターのおねーさんもピンとは来ていないようだ。

それともう一つ。この世界には俺が認識していた意味でのギルドは存在しない。この世界にあるギルドと言えば、冒険者ギルド、商人ギルド、海洋ギルド、王族ギルドなどで、所謂冒険者が所属するコミュニティとして徒党を組むためのギルドは存在しないようなのだ。冒険者は必ず冒険者ギルドに所属し、パーティーを組むことで徒党を組んでいる。その中間に組織は存在しない。

俺も冒険者ギルドにはまだ所属していないので、これを機に冒険者ギルドに所属する事にした。冒険者ギルドに所属していない冒険者はクエストを受注することができないのだ。今までクエストをせざるに神騎士にまでなったのかとマスターのおねーさんに聞かれたがそ

れは秘密と答えておいた。

そんなことよりもマスターはこの酒場から最上級職の騎士が登録を行った事が嬉しいらしく、とても上機嫌だった。

とりあえず俺は自分のステータスが確認する事が出来ないため、おおよそでも自分のステータスを確認すべく、討伐系のクエストを受けてみるつもりである。今日は既に日も暮れていたので、宿をとり明日の朝から出発する予定だ。この町周辺の魔獣討伐のクエストなので特に大きな問題は無いだろう。今回の討伐クエストは通常3人でパーティーを組んで行うクエストなのだが、このクエストの対象ランクがDだという事もあり、今回は特別に一人で請け負うことを了承してもらった。

まだ宿をとっていないことをマスターに伝えると、マスターは宿まで手配してくれた。この地域の冒険者を仕切っているだけあってその辺りにはとても顔が利くらしい。俺はマスターにお礼を言って酒場をあとにした。

宿までの地図もマスターに書いて貰ったので迷う心配もない。とはいってもこの街のことはゲームではかなり詳しく知っていたので迷う心配は無かったのだが。

俺は宿までの道程、歩きながら今日一日で判ったことを頭の中でまとめていた。まず先程わかった個人の主催している所謂ゲームの中の認識であるギルドは存在しないと言うこと。しかし恐らくはこれから先、冒険者の派閥みたいなものに出くわす可能性はあるだろうと思われる。どんな世界でも人は必ず群れるからだ。俺自身もこの異世界に飛ばされ、正直なところ不安もあつたためいいギルドがあれば入ろうと思っていた。しかしギルド自体が存在しなかったため、そもそも無理な話だったのだが。

もう一つはPVPの規制が無いということ。酒場のマスター曰く、街の自警団的な存在はあり、王宮直属の近衛騎士団が警察機構を取り仕切っているらしいのだが、冒険者にはあまり取り締まり自体が適用されていないらしい。

というのも冒険者は近衛よりも戦闘能力が高い場合がままあり、王族も冒険者に税を求めない代わりに冒険者は冒険者が取り締まりをせよという暗黙の了解がこの街には存在するのだ。冒険者ギルドもこの暗黙の了解に乗っ取り、あまりにも素行が悪い冒険者に対してはクエストの受注をさせないなどの制裁を加える場合もあるようだ。しかしながらあの酔っ払いのおっさんが幅を利かせていた通り、力の強い者の意見が通りやすい傾向があるようだ。

実際最上級職のLV100の冒険者が街中で暴れた場合、50人のLV50の初期職の者たちが束になって向かっていったところで恐らくは傷一つ付けることはできないであろう。あの酔っ払いの態度もこの世界では認められてしまうのだ。だからといって見境なく暴れても良いという事はないのだが。

論点が逸れてしまったが、ゲームの中では街中でプレイヤー同士が口論以上の争いを起こすことは物理的に不可能だった。そもそも街中では所定の場所以外でのPVPは禁止されていたためである。しかし先程の喧嘩があった通り、PVPなどという概念すら存在しているかどうかすら怪しい。俺も他の冒険者も現実に存在する人だからだ。

まだ未確定ではあるが、俺の考えでは冒険者が死んだ後神殿で復活することは無いと思っている。もし復活するのであれば冒険者自身が死を恐れなくなり先程があの酔っ払いが俺に対して恐怖したこと自体が嘘になるからだ。ただし回復魔法や蘇生魔法が存在する為、人に怪我を負わせることに対しては罪悪感が低い事も伺える。

やはりこの世界で平穩に生きていくにはある程度の腕っ節も必要ということだろう。

3話

神騎士が異世界を謳歌する

3話

目が覚めると見慣れぬ天井に違和感を感じた。そうだった、俺は異世界に来たんだったな。二度寝しようかとも考えたが、そんなことを考えている内に目が覚めてきたので起きることにした。

今日は酒場に行つてクエストを受注する予定だ。外もだいぶ明るくなっている。時間は相変わらずいまいち判らないが、窓から見える外の雰囲気から、そんなに遅い時間では無いだろう。俺は宿の中庭にある水場で顔を洗うと漸く完全に目が覚めた。

朝食を食べる為宿の食堂に向かうと、俺と同じ冒険者と思われる二人組が隣のテーブルで朝食を摂っていた。俺は呆けながらゆっくりと朝食を摂っていたが、隣のテーブルに座っている二人組みの女性の一人が俺の顔を見るなり何か気付いたらしく突然話しかけてきた。

「あの〜昨日の冒険者さんですよ？ソルドさんと喧嘩していた…」

「あゝ。あの酔っ払いつてソルドって名前だっけ？あいつの知り合いですか？だとしたらすいませんね。昨日はいきなり絡まれたもんで成敗しちゃいました。」

昨日の事を思い出し、ついつい喧嘩腰な口調になってしまった。嫌な事を思い出すと口調がきつくなってしまう。俺の悪い癖だ。

「違つんです。昨日私もソルドさんに絡まれたのであなたがソルド

さんを倒したとき、すつきりしちゃいました。あのソルドさんを一撃で倒すなんて凄く強いんですね。よかったらお名前教えて頂けませんか？私はミリアって言います。冒険者でジョブは フリースト 神官 です。まだ駆け出しなんですけどね…。ちなみにLvは3です。」

よく見れば昨日酒場であの酔っ払いに絡まれたときにやめた方がいいと忠告してきた女の子だと思う。神官か…俺はゲームの設定を思い出しながら考えていた。神官 は回復専門のジョブで初級職だったはずだ。しかもLv3ということは本当に駆け出しなんだな。だとするとあの酔っ払い野郎に絡まれても何もできないだろうな…。などと素早く考えながら俺も自己紹介をした。

「昨日は忠告ありがとう。俺はミストと言います。宜しく。冒険者でジョブは 神騎士 。Lvはまだ1ですよ。」

この子、結構可愛いななどと思いながら自己紹介をしていると隣にいた戦士らしき人物も話しかけてきた。

「私はミリアの護衛をしているシーナだ。宜しく頼む。私も冒険者でジョブは ウォーリアー 戦士 。Lvは53だ。 ガーディアン 守護戦士 になる為修行中だ。昨日の話はミリアから聞いた。あなたは随分強いそうだな。今度手合わせでもしてくれないか？」

戦士か…これも初級職だったはずだ。しかし随分Lvが離れているな。護衛というのもそのままの意味だろうか。ちなみに守護戦士は戦士の上級派生職で防御に特化している。戦士の上級派生職は他にも物理攻撃特化の バースカー 狂戦士 や平均的な能力の フエンサー 剣士 などがある。戦士派生職は魔法を苦手とするがその分特化した能力値が他の職種と比べ非常に高い。判りやすい能力のため、ゲームでも人気のある職種だった。

「こちらこそ宜しく。今度機会があれば手合わせしましょう。」

そう言っただけで俺は二人と握手を交わし暫くの間この世界についての情報収集のため雑談を交わした。大した情報得られなかったがこの二人の話から推測すると、俺が思っている以上に秘石が貴重な品である事だった。この辺りの地域では秘石が殆ど入手できないらしい。

シーナの持っている槍はBランクの秘石を練成した槍らしく、大いに自慢をしていたが、俺にとって秘石は大して貴重なものではなかった。何故なら俺はマスタードラゴンばかり狩っていたため、あらゆる属性のSランクの秘石を併せて100個以上持っていたからだ。俺が今装備しているのも全てSSSランクの秘石から練成した装備であり、Bランク秘石から練成された槍が凄いととても思えなかった。冒険者であったとしても神騎士という名前は知っていてこそその強さや神騎士になる為の条件などはあまり知られていないようだ。

ミアとシーナは今日は二人でクエストを受注する予定らしい。Dランクのクエストを受注したらしいのだが、ミアの護衛が一人しかいないため不安なのだと言っていた。昨日のうちに酒場でパーティーメンバーの募集をしていたのだが、ミアが絡まれたり俺と酔っ払い野郎の喧嘩があったりしたせいで人が集まらなかった様なのだ。俺も今日はクエストを受注する予定だということ二人に話すと、話の流れで一緒に行くことになってしまった。

俺は今日は自分の力を試すためにクエストを受ける予定だったのだが、どうせ暇なので一緒にクエストを受注する事を承諾した。ゲームとは違う為、勝手がイマイチわからなかったのでパーティーリーダーはシーナに任せる事にする。適当に付いていってぱつと魔獣を討伐して帰ってこようと俺は心に決めていた。どうせDランクの討伐クエストなど大したことはないのだ。恐らくは昨日喧嘩をした酔

っ払い野郎よりも手ごたえが無いだろう。

シーナが一時間後に酒場で待ち合わせだと提案してきた。しかし俺は時間が正確に判らない為そのことを伝えると、酒場で時間が判る道具を売っているらしい。待ち合わせ時間にはまだ大分早いだろうが早速酒場に向かうことにする。酒場に到着すると相変わらず冒険者で賑わっていた。俺はマスターのおねーさんに先程の時間の判る道具について聞いてみた。

「それなら10万ジュエルかEランクの時空間属性の秘石と交換よ。簡単に説明するわね。この時計という道具は太陽が出ている時間なら正確に時間を知る事が出来るわ。魔力を通すとこの真ん中 についている秘石が太陽の位置を図って時間が判るようになってるの。」

俺はEランクの時空間属性の秘石を持っているかどうか魔法のバツグを確認した。だがEランクの秘石などゲームではすぐに売り払っていたので持っていなかった。割高ではあったが10万ジュエルを払い時計を受け取る。形は少し大きめなブレスレットのようだ。真ん中に秘石が付いている。早速魔力を通してみると「9：15」と真ん中の秘石に表示された。まんま腕時計と同じだ。しかもデジタル表記だったので少し笑いそうになった。アラーム機能も付いているらしい。

そしてもう一つ。携帯電話もある様なのだ。マスターのおねーさんは今日入荷した事を教えてくれた。値段は100万ジュエルかCランクの時空間属性の秘石と交換。俺はCランクの秘石も持っていなかった。Aランクの時空間属性の秘石なら沢山持っていたので、交換できるかマスターに聞いてみたらとても驚かれました。マスター曰く

「何個でも持って行っていいわよ。」

とほくほく顔で言われたため、1個しか使う予定はないがせっかくなので3個ほど貰う事にする。この携帯電話は形も機能もまんま俺の知っている携帯電話と一緒にだ。違うのは魔力で動かす事くらいだ。さすがにメール機能はないが、折りたたみ式で上半分に液晶画面のかわりだと思われる平たく加工された秘石が付いていた。暫く携帯電話をいじっているとミリアとシーナが酒場に入ってきた。

俺は早速ミリアとシーナに先程交換した携帯電話をあげることにした。シーナは既に持っているので必要ないといっていた。ミリアはこんな高級品貰うことは出来ないと言い張っていたが、俺も貰った様なもんだからと言って無理やり受け取らせた。余ってしまった残りの一つは必要が無いのでマスターに返した。二人と早速フレンド登録する。赤外線通信をするように携帯端末の魔力情報を交換するとフレンド登録出来るらしい。この世界ではチャットやフレンド登録はこの携帯電話を使って行うようだ。

通信の手段がないと不便でしょうがない為、ある程度の稼ぎのある冒険者はみんな持っていると言っているとマスターは言っていた。魔力を媒介にしているので通信出来ない場所は基本的には無いとのことだった。地底深くの迷宮ですらこの携帯電話はいつでもバリ3だ。

一通りフレンド登録が終わったのでマスターのおねーさんからクエストを受注し、出掛けることにした。今回の討伐対象はワーウルフ10体だ。対象Lvは初級職ならLv40以上。ワーウルフは簡単に言うとなんぞ足歩行をする武器を持った狼だ。知能はあまり高くないため魔法などは使っていない。ちなみに討伐クエストなどでは証明部位を提出したりはしなくてもいいらしい。というのもクエストを受注する際にスフィアでLvを計るのだが、その際に測

4話

神騎士が異世界を謳歌する

4話

今回受注したクエストは城下街 フィストア の北門を出て5km程行った場所にある森でよく出没する ワーウルフ の討伐だ。移動手段は徒歩。

この世界には騎獣と呼ばれる生物があり、ポピュラーなところだと馬やランドドラゴンなどがいるとシーナが教えてくれた。他にもグリフォンやペガサス、小型の飛竜などを騎獣にしている冒険者もいるようだ。召喚士は召喚獣を騎獣にしたりもするらしい。

他にも時空間魔法で街同士を繋ぐ ポート と呼ばれる施設が街にはあるのだが、ポートを使用するのはかなり値段が張るらしく、稼ぎのある有能な冒険者以外はあまり使っていないとのことだった。暫く歩いていると、俺の歩く速度がかなり早いらしくミリアとシーナは既に走っていた。俺自身は普通に歩いているつもりなのだが神靴 志那都比古（いひなひこ）の短靴 の特殊効果で移動速度が上昇しているようだ。二人とも息が切れているので俺はもっとゆっくり歩くようにした。

小一時間程歩くと目的の森の入口に到着した。森の奥にはあり得ないほど巨大な木が立っているのが見える。この距離でも飛びぬけて大きいことが判る為、恐らく50m以上の高さがあるだろう。ゲームの知識から推測するとあの大木は ドワーフの護樹 だ。

あの大木の麓に住んでいるドワーフは人間と友好的で、ランクの高い秘石を練成することが出来るため、装備を練成するときは必ずお

世話になっていた。今日はドワーフに用はないのであの木の麓まで行く予定はない。

森には幅が5mほどの道があり通れるようになっていた。この辺りはいかにもゲーム的だ。脇道に入って行く事も出来るが木と木の間隔狭いため剣を振る事が出来ないだろう。そのため脇道には入って行かないのが一般的らしい。ワーウルフもこの道に普通に出没する様だ。

ゆつくりと歩いていると脇道から4体のワーウルフが出てきた。

こちらに向かつて走ってくる。俺とシーナは腰に佩いている剣を抜き、ミリアを庇う様な陣形をとる。おもむろに一匹のワーウルフに向かつて俺は魔法を唱えた。

「まずは魔法で先制攻撃する。二人とも俺の後ろに回れ！行くぞ！
ファイアーボール」

直径50cm程もある大きな炎の玉が俺の掌から射出し、こちらに向かつてくるワーウルフの先頭にいる一匹に直撃した。凄まじい爆発が起こり周りのワーウルフも爆発に巻き込まれる。4匹のワーウルフは力尽きる様にその場に倒れしばらくすると文字通り消滅した。この世界の魔獣はゲームと同じように、死ぬと霧散して消滅するようだ。霧散したときにワーウルフから出たキラキラしたものが俺やミリア、シーナに吸収される。恐らく経験値だろう。パーティー登録している為だと思われるが経験値は三人に均等に分配されたようだ。

そしてワーウルフが死んだと思われる場所にジュエルが落ちていた。大した金額ではないが魔獣を倒すとジュエルが手に入るゲームでの仕様は、このような形でこの世界にも反映されているようだ。

俺は驚いていた。ここまで忠実にゲームの仕様が反映されているとは思わなかったからだ。この世界では腹も減るし、汗もかく。怪我をすれば血も出る。それなのに魔獣が死んだときに霧散するのは、なんだか納得がいかなかった。魔獣の遺体を道中見かけなかったのはこのような仕様がこの世界にはある為だったのだ。シーナに詳しく聞いてみると今更何を言っているのかといった口調で呆れられてしまった。

この世界に住んでいる者にとってはごく当たり前の認識らしい。冒険者の死んだ場合についてもシーナに聞いてみたが、冒険者が死んだ場合は話が違おうようだ。端的に言くと冒険者は死ぬ。これはゲームの仕様は全く反映されておらず、普通に死ぬのだ。

ただし蘇生の魔法が存在するため、戦闘などで本人が寿命や病気で外の要因で死んだ場合、肉体が残っていれば蘇生の魔法で生き返ることが可能であるらしい。しかし蘇生の魔法が使える者などほとんどいないため、実際にシーナもミアも蘇生した人を見たことはないとのことだった。

俺は蘇生の魔法を覚えている。Sランク光の秘石を使用して覚えるリバイブ魔法のはずだ。ということは俺と一緒に戦闘をする者は俺が死なない限り死ぬことは無いということになる。

先程の戦闘で判ったことだが、神騎士のステータスはかなり高い様だ。ワールフという弱い部類の魔獣ではあるが、Eランクの魔法であるファイヤーボールで4匹一度に瞬殺してしまう魔法の攻撃力は、騎士の時には無かったと思う。せいぜい1匹か2匹倒すのが関の山だろう。魔法攻撃力は魔力に依存するため、この計算だとLv1の神騎士はLv255の騎士より魔力が高い計算なのだ。これからLvが上がっていったらどれほどの強さになるのか俺には想像もつかなかった。

このことについてはシーナやミアも驚いていた。あんな威力の

ファイアーボール は見たことがないらしいのだ。シーナはLv5
0程の 魔術師^{マジシャン} と一緒にクエストを受けたことがあるのだが、フ
アイアーボール は10cm程度の火球だったようだ。初級職であ
るとはいえ、魔術師は魔法に特化したジョブであるのにも関わらず、
単純計算では俺の魔力の5分の1程度だということになる。
俺はなんだか少しだけ自分が怖くなってきた。強いことに越したこ
とはないがあまりにも突き抜けた強さに、俺が本気を出したらどう
なるんだらうと思ったからだ。

よほどのことがない限り上級魔法を使うのはやめようと、俺は心に
決めた。

先程ワーウルフを倒した際に落ちていたジュエルを一応拾い集め、
シーナとミリアにすべて渡した。分配しようとシーナは言っていた
が、その程度のジュエルは俺には必要ない事を伝えて二人で分ける
様に言った。

何のため周りを警戒しながらゆっくりと歩いているとさつきと同じ
ように脇道から、今度は3匹のワーウルフがこちらに向かって走っ
てきた。今度は魔法で迎撃するのをやめて剣で対応する。

俺は走ってワーウルフの目の前まで行き、胴を薙ぐように斬りつけ
た。殆ど手応えもなくワーウルフは胴で両断され地面に倒れ霧散す
る。残りの2匹も反撃する間もなく一瞬で両断された。

なんとなく予想はしていたが俺は物理攻撃力も相当高いらしい。両
断する時も豆腐を斬る様な感触しかなかった。剣にはワーウルフの
血すら付いていない。

シーナとミリアには俺の動きが最初しか見えなかったようだ。二人
には気がついたら3匹のワーウルフが両断され霧散していた様にし
か見えなかった。

クエストのノルマである10匹討伐までの残り3匹はシーナとミアに倒してもらうことにする。俺とシーナ違いをの強さの差を確認するためだ。俺はミアを守ることにだけに専念するをシーナに伝えた。

暫くするとちょうど3匹のワーウルフが脇道から出てきたため、シーナが先頭に立ちワーウルフを迎撃する。ミアはプロテクトの魔法をシーナにかけ、シーナは1匹のワーウルフを槍で突いて攻撃している。3匹からの同時攻撃を受け少しだけ苦戦しているようだが、盾をうまく使っているため殆どダメージはくらっていないようだ。ミアも後方から魔法でうまく支援しているようだ。一匹が俺の方に来てしまった為俺は剣で斬りつけ一撃で霧散させた。シーナも1匹倒したようだ。最後の1匹もシーナが応戦し、暫くするとシーナがワーウルフを槍で貫き霧散させた。

やはりシーナは俺のようにあっさりとワーウルフを倒すことは出来ないようだ。武器の違いもあるがLv50前後の戦士と比べても俺の物理攻撃力は段違いのようだ。正直なところシーナとは差がありすぎて俺の強さを測るための参考にならなかった。

シーナは肩口から少しだけ血を流していたがミアがヒールの魔法をかけて回復させた。二人とも少しだけ息を切らしていたがこの程度ならまだ余裕がある様だった。

クエストのノルマも達成したので俺達はさつさと城下街　フィストア　に戻ることにした。俺の強さを垣間見たシーナとミアは尊敬の眼差しで俺のを見ていたが、余計なことはあまり言いたくなかったため二人の眼差しを気付かない振りをしてやり過ごした。

俺は街に着いたら二人に色々聞かれそうで嫌だなあなどと考えていた。

5話

神騎士が異世界を謳歌する

5話

シーナとミリアが何か言いたげなのを尻目に俺は半分無視を決め込みながらゆっくりとしたペースで歩いていると、街の方へ向かっていたであろう馬車が通りの真ん中で立ち往生していた。その馬車は商人が使う様な荷台に幌のついた割に大型の馬車だ。馬も4頭馬車に繋がれている。初めて馬車というものを見たため俺は若干テンションが上がる。確かゲームの中でも馬車というものは無かったはずだ。

馬車の後方と両側には護衛と思われる男達が併せて5人、周囲を警戒しながら大きな窪みに嵌っている車輪を引っ張り上げようと馬車を押している。

御者台に座っている傷だらけの鎧を着た男もにイライラとした様子で頻りに馬達に鞭を入れていた。

「手伝おうか？」

俺は馬車を横切る際に御者台の男に声をかけたが、チツと舌打ちをされた。

「いや。結構だ。」

断られて手伝う義理もないので、おれはそのまま立ち去ろうとしたが男達のリーダーだと思われる人相の悪い男が周りの連中に何やらぼそぼそ言っていた。

「危ない！」

二ーナの声が後方で聞こえたため、俺は咄嗟に振り向くと先程の人相の悪い男が小振りな斧で今にも俺に斬りかからんと斧を振り上げていた。左手に持っていた盾で斧を防ぐと、俺は腰に佩いている剣を抜き放った。

シーナとミアは馬車と男達を挟んで向こう側にいる。すると斧を持った人相の悪い男がニヤニヤしながら俺に向かって言った。馬車の周りの男達もそれぞれ剣や斧などを手に構えている。

「運が良かったなあ。だが今の一撃で死んでた方が楽だったかもしれないぜ？この嬢ちゃん達は俺らが貰っていつてやるからお前は大人しくここで死ね！」

どうやらこいつらは盗賊か何かのようだ。そうなるとあの馬車の積荷が非常に気になる。魔法で馬車ごとこいつらを焼き払ってもいいが、馬車に金目のものでも積んであったらもったいないな…などと俺は呑気に考えていた。

正直こいつら程度に負ける気はしない。5人程度なら瞬殺出来る自信があるし、シーナも恐らくこいつら一人一人よりは強いだろう。ミアはきちんとシーナの後ろに隠れているからとりあえずは安心だ。

ただ俺は少し迷っていた。確かにこいつらは悪党の様だし斬っても問題は無いだろうが俺はまだ人を斬ったことがない。先程魔獣を斬った際も不思議と恐怖感は無かったが、人間の命を奪ってしまう

ことには抵抗があった。

何かいい方法は無いだろうかと素早く考えていると、俺はある魔法を思い出した。その魔法の名前は「ダークミスト」。閻属性の魔法なのだがゲーム内では所謂ネタ魔法として有名だった。魔法の有効範囲はかなり広く周囲10mくらいは覆える程の灰色の霧を発生させ対象を眠らせる魔法なのだが、範囲が広すぎるためパーティーを組んでいる際は仲間まで眠らせてしまうある意味自爆魔法だ。しかも自分の魔力が高くないと効果がすぐ切れてしまう上に人間型の生物にしか効かない為、ほとんどの魔獣には効果がない。更にはSランクの闇の秘石を使わないと習得することが出来ない為ネタ魔法と言われていたのだ。俺も片手で数える程しか使用したことがない。

「シーナ！ミリア！少し離れている！！…ダークミスト」

魔法を唱えると辺りは灰色に霧に覆われた。霧で覆われているため視界が悪く殆ど何も見えないがドサツと言う音が霧の中から数回聞こえた。

霧が晴れると男達は全員眠っていた。あろうことか馬車から少し離れた場所に退避しているにも関わらずシーナとミリアも寝ていた。やっぱりある意味自爆魔法だなと改めて思いながら馬車の向こうで寝ているシーナとミリアを揺り起こす。

念のため男達は馬車に括り付けてあった縄で手足を縛っておいた。当然武器もすべて没収だ。目が覚めて魔法を唱えられたら厄介なので猿轡も噛ませておいた。何か書くものでもあれば額に「肉」と書いてやりたかったが生憎書くものは持っていなかった。残念だ。

没収した武器はどれもごく一般的な量産された武器だけだったので少し離れた草むらに放っておいた。シーナとミリアはまだ眠たそうにしていたが、俺が馬車に積んである荷物を確認しようとする二人も興味があつたらしく後ろから覗き込んでいた。

馬車の幌をめくると中には半裸のまま手足を縛られ猿轡をした十代後半程の男が横たわっていた。恐らく盗賊？達に誘拐でもされたのだろう。眠っていたのはこの馬車も先程の「ダークミスト」で覆ってしまった為だと思うが。馬車に乗っていたのが金品の類では無かったため俺は少しがっかりしたが、この少年の猿轡と手足の縄を外して揺り起こし話を聞くことにした。

暫くすると少年はうつすらと目を開き周りを見渡した後、自分の置かれている状況を思い出したのか物凄い勢いで俺から離れるように馬車の隅へ逃げ叫びだした。

「僕を如何する気だ！お前は何者だ！！俺を　フィストア　の第3皇子と知っての狼藉か？王が黙っちゃいないぞ！！」

俺のことを外で寝ている盗賊？の仲間かなにかと勘違いしているようである。すると俺の後ろから覗き込んでいたミアリアが声を上げた。

「義兄様！？」

「……もしかミアリアか？どういうことだ？？」

ミアリアが事の顛末を皇子に説明をした。皇子も納得したようで俺に礼を言ってきた。皇子は半裸のままだったので俺は笑いを堪えていたが…

皇子の話によれば攫われたのは昨日の夜のことらしい。この皇子はしばしば夜の城下街で遊んでいたのだが、このことは城下でそれなりに有名になってしまっていた。それを知った盗賊たちは身代金目的に皇子の誘拐を企て、昨晚皇子がお楽しみ最中に誘拐をしたのだという。この盗賊たちはこの界隈ではそれなりに名の通った盗賊

気付いたらユニークアクセスが1000人超えていました。

こんな駄作を読んで下さいまして本当にありがとうございます。

これからも宜しくお願いします。

6話

神騎士が異世界を謳歌する

6話

街の入口には街道をふさぐような形で簡易的な関所が設けられていた。俺達が朝街を出るころには無かったはずなのだが、関所は何やら物々しい雰囲気です衛兵達が街道を通る馬車や通行人を止め、各々に話を聞いていた。関所の街側には既に長い行列が出来ている。シーナが関所の衛兵に何があったのか聞いてみると、どうやら王宮から皇子が攫われたとの知らせがあり、城下の各出入口で簡易的な関所が設けられ皇子とその誘拐犯を街から出さないようにしているようだ。

既に街中でも厳戒態勢が布かれているらしく、街の各所では小隊を組んだ衛兵達が警邏をしているらしい。俺も馬車の荷台でその話を聞いていたのだが目の前にいる皇子は大事になってしまったと小さな声で呟き、何やら苦い顔をしていた。しかし半裸のまま神妙な顔つきをしている為俺には笑いを誘っているようにしか見えなかったのだが。

俺は馬車から降りて関所にいる衛兵に皇子を救出して馬車に乗っている事を伝えた。衛兵は馬車の中にいる皇子を確認すると件の携帯を懐から取り出し皇子の無事をどこかに報告し、皇子の身柄を預かってもいいか俺に確認してきた。俺が構わない旨を伝えると、皇子は半裸のまま衛兵と一緒に詰め所だと思われる所に行くようだ。詰め所に行く際、皇子は俺達に対して優雅な仕草で礼を言っていたが、なにぶん半裸ではそんな仕草すら滑稽に見え、俺はただ必死に

笑いを堪えるので精一杯だった。序と一緒に乗っていた盗賊達も馬車ごと引き取ってもらった。どうせ馬車なんか必要が無く拘束してあるとは言え、盗賊達といつまでも一緒にいることに嫌悪感を覚えていたからだ。皇子が詰め所に入った後、簡易関所は衛兵達の手で早くも撤去され始めていた。

先程話をした衛兵にここで暫く待つている様に言われたのだが、俺は思い出したようにミリアとシーナは皇子と一緒に行かなくてもよかったのかと二人に聞いてみた。シーナは今話すと長くなるから後で話すとだけ俺に言い、何故かミリアはすいませんと俺に謝った。

そうこうしているうちに城の方から大きな馬車が二台迎えにきた。そのうちの一台に皇子達が乗り込み、もう一台に俺達三人は乗ることになったのだが、俺は王族の馬車の乗り心地に感服していた。先程の馬車の荷台は人が乗る様には作られていなかったとはいえ、雲泥の差があったからだ。ほんの少しの時間乗っただけなのに尻が痛かった先程の馬車の荷台とは違い、この馬車は殆ど揺れすら感じず滑るように街中を進んでいった。

街のほぼ中央に位置する王城に到着すると王と謁見する手筈になっているらしく、謁見の用意が出来るまでの暫くのあいだ待合室の様な場所に通された。待合室行くまでの通路には、いかにもお城らしい煌びやかな装飾や豪華な調度品が随処に散りばめられており、初めてみる光景に俺は田舎者が初めて都会にでも来たかのようにいちいち驚きながら城の中を歩いていった。ゲームの中でも王城は存在していたが、中に入る為には特殊なクエストを受けなければならず、殆どの時間を神騎士になる為だけに費やしていた俺は王城に入った事がなかったのだ。俺の後ろを歩いていくシーナとミリアはやや呆れ顔で俺のことを見ていたが、初めて城の中に入ったのだからテンションが上がってしまうのはしょうが

ないじゃないか！と心の中で自分で自分に言い訳をし、周りの目を気にせず俺は初めての王城を楽しんでいた。

ちなみに王との謁見とか言っていたが緊張などは全くしていない。それどころかテンションが上がりすぎて、妙にハイな気分になっていた。

待合室に到着すると見たことも無い様な大きなソファがいくつか置いてあり、床には何か熊っぽい動物の毛皮が布いてある。部屋の隅にはメイドらしき人が控えており、飲み物をお持ちしましょうか？と聞かれた為俺は適当にお願いしておいた。冷やした紅茶の様な飲み物が運ばれてきてので、それを飲みながら暫くシーナ達と雑談しながら待っている、部屋の扉がノックされ用意が出来た為謁見の間まで移動するように言われた。

謁見の間の扉の前では全身鎧を着込んだ兵が身の丈程もある槍を持ち立っている。扉を開けるといかにもゲームにありそうな雰囲気。謁見の間が目の前に広がっていた。無駄に広いその部屋は玉座までの通路に赤絨毯が敷いてあり、20人ほどの兵が部屋の左右の壁際に並んでいる。作法など知らない俺はずかしくと王の前まで進んで行ったのだが、シーナに小声で窘められ玉座の手前にある階段の下で足を止め、取り合えず頭を下げた。俺の左右にいたシーナとミリアは膝を付き頭を下けている。俺だけ立っている状態だったが王は別に構わないとう素振りをして俺達に楽にするように言った後、厳かな雰囲気の話し始めた。

「この度は皇子を盗賊の手から救ってくれ、本当に感謝する。ついでには何か褒美を取らせたいのだが貴殿は何か望むものはあるか？」

俺は暫く考えたのだが特に欲しいものなど考え付かなかった。強いて言えばジュエルだろうか。ただジュエルを要求するのは芸がない

気がして何かないものかと考えていたが、なにも思いつかないので思いついたことをありのまま言ってみる事にした。

「ん、別に欲しいものは今のところ余りないですね。強いて言うならジュエルですが、ジュエルも今のところ困って無いので必要ないかなと思っています。なんでも良いのであれば俺の横にいるこの二人に褒美をやってもらえないですか？」

そう言うと俺の左右にいたシーナとミリアは驚いたような顔で膝をついたまま俺を見上げた。俺は二人に向かってニツと笑い王の方に顔を戻すと話を続けた。

「俺はこれからこの世界のことを知る為の旅に出ようかと思ってます。だから余計なものは別に必要無くて。この二人に褒美を貰う権利を譲るのは可能ですか？」

俺がそう言うと玉座に座った王は大きな声で笑い出した。

「わはははは。面白い事を言う青年だ。では貴殿の望むとおりにしよう。してその二人、貴殿等は何を望む？」

シーナとミリアは顔を見合わせた後、シーナは小さな声で俺に言った。

「本当にいいのか？私達は何もしていないのだぞ？確かに私達に望みはある。だが出会って間もないのにこんなことをしてもらうのは些か気が引ける。」

ミリアも同様に俺に向かって困ったように言う。

「そうですね。確かに私達は目的のために城を出て冒険者となりました。ですがミストさんにはお世話になってるばかりで申し訳ないです。それにミストさんには私達が何を望んでいるのか、何故冒険者をしているのか話してませんかよね？」

確かに俺は何故姫であるミアとその護衛のシーナが冒険者を選んだ理由を聞いていなかった。だが姫と言う立場を捨ててまで冒険者になったのはきつと深い理由があると考えていた。しかも俺は王から貰う褒美に大した魅力は感じていなかった為、思い付きではあるが二人に褒美を譲ることにしたのだ。

「いいんだよ。俺は王からの褒美なんて本当に要らないんだ。というより今は本当に欲しいものなんて無いんだよ。俺はこの世界に来ることが出来ただけで……」

そこで俺は口を噤んだ。まだ誰にも俺が異世界からの訪問者だということとは明らかにしていない。そしてこれからも誰にも言うつもりはない。今自分で言って改めて気がついたのだが、俺はこの世界に来ることが出来ただけで今は本当に満足してしまっている。確かにほんの少しだけ望郷の思いはある。ただこの世界に来ることが出来た喜びの方がずっと大きいのだ。この異世界に別れを告げるくらいなら俺は元の世界に帰れなくてもいいとすら思っていた。

そして俺はこの世界で作ることのできた人との繋がりを大切にしたいと思っている。元の世界の俺はゲームの中以外では腹を割って人と接することなど殆ど無かったのだから……。

暫く俺達が揉めるように話しこんでいると玉座の王は待ち草臥れた様に言った。

「何やら揉めているようじゃの。今すぐに決められないのであれば後日でも構わないのだがどうする?」

王の言葉にシーナはミリアと目を合わせゆつくりと頷いた後、覚悟を決めたような強い口調で王に望みを伝えた。

「王、我等の望みは半年後に行われる王宮闘技大会の参加資格です!ここにおります今は亡きミネア第3王妃の娘でありますミリア様に参加資格をお与え下さい!」

先程まで草臥れた様になっていた王は前に乗り出す様に姿勢を直し、大きく目を見開いて驚いた様子で俺達を見ていた。王の周りにいる兵士や文官などもざわざわと騒ぎ出していた。

- - -
- - -
- - -

読んで頂けると嬉しいです。

7話

神騎士が異世界を謳歌する

7話

50年に一度行われるという王宮闘技大会の参加資格を得るという事は実はこの国では大きな意味があった。俺はまだこの時には知らなかったのだがこの闘技大会の勝者もしくはその推薦者はこの国の政治の中で大きな発言権を得る事が出来る。それは国の中では王の次に政治において権力のある宰相になる権利を得られるからだ。ただし参加資格を得られるのは王の血縁者と現在国の要職に就いている者に限る。参加資格を得られた者は自分または推薦者が闘技大会に出場することが出来るのだ。

闘技大会の参加資格は特例として一般参加から1枠だけ予選を勝ち抜いた者のみ出場することが出来る。だがフィストア王国1200年の歴史の中でも一般参加から優勝した者は未だかつて一人もいないらしい。それどころか1回でも勝ち抜いたものですら数える程しかないようだ。この大会に向け各々の大臣や王族たちは優秀な冒険者のスポンサーになったりお抱えの衛兵などを育成しているため、一般参加から勝ち抜いた参加者は殆ど勝ち目がない。しかも優秀な冒険者ほど王宮の宰相になることに魅力を感じる者が殆ど居ないため、一般参加の参加者は錬度が低い者ばかりで全くと言っていいほど今まで注目を浴びる事は無かった。

話は今俺達が王と謁見していた場面に戻る。王は眼の前にいる人物がミネア王妃の娘だということをシーナの話聞くまで気付いて

無かったようだった。眼の前の人物がミリアだと言うことを告げられ大層驚いた様子で先程の回答をするのに困っている様子だった。すると王の隣にいた現宰相であるミゲルと名乗る男がシーナに向かって話し始めた。

「そなたは確かに元王女ミリア様に間違いない。だが3か月前にミネア王妃が死去した際に王宮との縁を切られこの城を出て行ったはずだが？それを今更闘技大会に参加させるとは虫が良過ぎるのではないか？この国に於いて闘技大会がどういう位置を示しているものなのかそなた等も知らぬわけではあるまい。そんなに参加したいのであれば一般参加枠から出場したら良いではないか。」

シーナは睨みつける様にミゲル宰相の方を見ていたが下唇を噛み、悔しそうに俯いてしまった。ミリアも困った様子で助けを求める様に俺の方を見ている。だが俺にはどうする事も出来なかった。闘技大会がどのようなものかですらこの時は俺は知らなかったのだから。俺もどうしたら良いか判らないでいるとシーナは思い立った様に王と宰相に向かって話始めた。

「望みは何かと聞かれたので答えた迄です。今回の件の報酬としては釣り合わないのです。話は無かった事にして頂いて結構です。」

シーナは悔しそうに一步下がりが、出過ぎた真似をして申し訳ありませんとミリアに一言だけ言って下を向いてしまい、悔しさの余り小さく肩を震わしているのを俺は見ってしまった。ミリアも悔しそうにはしていたが、気丈に宰相を鋭い眼光で見つめていた。俺もなんとかしてやりたいとは思ったが、現状がよく判っていない俺には解決策を見つける事は出来なかった。

「どうやら私達の願いは聞き届けられない様です。これ以外の望み

は私達にはありません。ご迷惑をまた掛ける様な事になってしまつて申し訳ありませんでした。」

そう言つて俺にペコリと頭を下げミリアも一歩下がつてしまった。俺も正直どうしようか悩んだが取り敢えず貰えるものは貰つておこつと思ひ王に願ひ出た。

「なんか良く判らないんですがこの二人は先程の願ひの他には無い様なので、う〜んどうしようかな……まあ持つても困らないんでジュエルください。そうだな…3千万ジュエルくらいでいいです。それが無理ならSSランク以上の秘石でもいいですよ？」

俺は少しだけ吹っ掛けてみた。皇子の命の値段と比べれば安い報酬だとは思つが、大した難度でも無いクエストだと考えると破格の値段ではあるだろう。しかし先程シーナとミリアの願ひを受け入れなかつた事を引き合いにすればいけるだろうと俺は踏んでいた。

その額を聞いて大臣は苦々しい顔をしていた。だが先程断つた手前断るわけにはいかないとでも考えているのである。正直俺としてはSSSランクの秘石が欲しかつたのだが、この地域周辺では秘石が高級である事を鑑みてこの王宮では用意できないだろう。それならば多少妥協してでも現実味のある金額を願ひ出た方が勝算があると思つていた。

王も始めはかなりの金額に驚いた様子だったが、腹を決めた様に一度深呼吸して

「では報酬として3千万ジュエルをそなた等に与える。」

と言ひ、何やら人を呼んですぐに俺達の目の前に3千万ジュエルを用意してくれた。俺達は王に礼を言つと魔法の子袋にジュエルを仕舞い込み改めてもう一度王に向かって礼をして謁見の間を後にした。

そしてそのまま王城を出て街にある宿へ向かい、俺は二人に詳しい話を聞く事にしたのだ。

宿に着くと既に日は傾き始めていた。だが以前シーナとミリアは俺の後ろをとぼとぼと歩き元気がない様子だった。宿に到着するなり俺はまず二人に先程の報酬を山分けしようと言案し、一人1千わずつ均等に分けた。ミリアもシーナも要らないと一度は返されそうになったが、先立つものは必要だからとなんとか受け取って貰いその代わりと言ってはなんだがと言って二人に王宮との関係を詳しく聞くために話を聞くことにした。詳しい話の顛末はこうである。

今から約3カ月程前、ミリアの母であるミネア王妃は何者かの手によつて殺された。王宮の調べでは一緒に死んでいた闘技大会に推薦するためにミネア王妃が招いた冒険者と心中したという結果だったがその話をミリアもシーナも信じる事が出来なかったのだ。

何故ならミリアとシーナから見たその冒険者とミネア王妃は間違はなく恋仲では無かった。確かにその冒険者とミネア王妃は古くから付き合いがあり、ミリアもとても良くして貰っていたがミネア王妃は人徳があり各所にそう言った知り合いがいたので特別な仲であるとは考え辛かったのだ。

しかしミネア王妃が所謂不倫をし、その相手と心中をしたことでミネア王妃は王に背く重罪を犯したとされミリアは王宮には居られなくなつてしまったのだ。幼いころからミリアの側近として一緒にいたシーナ共々納得のいかないまま王宮から追放されてしまった。それからシーナは幸いにも王族の近衛隊に属していた事もあり、それなりに腕が立つた為冒険者になる事にした。行くあての無いミリアもそれに乗じて冒険者となつたのだ。

だが王妃の無念を晴らすため二人は独自に王妃が殺された理由について調べていた。するとある情報を入手したのだ。それは前回の闘技大会直前にもこれと同じような事件が起こっていた。それも今回

の事件と同じように有能な冒険者を雇った当時大臣職を務めていた者が冒険者共々毒殺されるという事件だった。この事件も結局犯人は捕えられずに迷宮入りしている。そして今回の事件も前回の事件も最終的な判決を下したのは宰相である。しかも当時も今も同じミゲルの一族から選出された宰相だった。

この事からシーナもミリアも今回の事件の黒幕はミゲル宰相であると踏んでいた。ミゲル宰相は保身のために闘技大会で優勝しなければならずもし優勝できなかった場合は宰相の座を優勝者に譲らなければならぬからだ。2大会連続で闘技大会で優勝者を輩出しているミゲル家は100年間宰相という職に着き続けている。だがミゲル家には黒い噂が絶えなかった。資産家でもあるミゲル家は宰相の座を利用して国内ではかなり荒稼ぎしているようだ。その事からも宰相の座に相当執着している事が判る。

その話を聞いて俺も間違いないくミリアの母を殺害したのは現宰相だろうと確信した。そして俺は二人に協力すべく申し出た。

「一般参加なら闘技大会に出場する事ができるんだよな？ だったら予選勝ち抜いて闘技大会に参加すればいいんじゃないのか？ もし二人にやる気があるなら俺と一緒に鍛錬するかい？ 俺もある程度強いはずだから二人に協力は出来ると思う。とは言っても闘技大会のレベルがどれくらいのものなのかは知らないんだがな。」

俺がそう言うと二人は始めきよんとしていた。だが俺の言った言葉を理解すると同時に二人は俺の方を真っ直ぐ見て、お願いしますと頭を下げてきた。早速明日からLv上げの始まりだ。期間は約半年、俺も目の前の二人もどこまで強くなることが出来るんだろうか……。

8話

神騎士が異世界を謳歌する

8話

俺達三人は奥深い森の更に奥にある一つ目巨人の集落の手前に来ていた。ここに来るには王都フィストアの城下街にあるポータルを使用して大地と森の都 サীগス まで転移した後、更に丸一日ほど森を北へ進まなければ来る事が出来ない。あの時王宮闘技大会に出場する事を決意してから既に1カ月程経っていた。Lv60になったシーナは念願の上級職である守護戦士に転職し、今やLvも11まで上がっている。ミアもあれからあらゆる戦闘にも愚痴すら零さず潜り抜けそろそろ転職が出来るLv48にまでなっていた。俺はと言うと未だLv2だ。確かに今まではシーナとミアに併せ、低いLv帯の魔獣ばかりと戦ってきたのだが明らかにLvの上がる速度がおかしいと感じていた。シーナとミアのLvが相当上がっていることから判るようにLv帯の低い魔獣ばかりを相手にしてきたとは言え、ここ1カ月かなり無茶なLvの上げ方してきた。どのくらい無茶を繰り返してきたかと言うと1日平均12時間は戦闘に没頭してきた。確かにこの1カ月の間、俺自身が魔獣と戦って苦戦する事は皆無だったが経験値としてはそれなりに稼いでいるはずなのだ。

以前ゲームではLvの上がり方に法則があった。下級職と上級職のLvが上がる為に必要な経験値量の差は約2倍だ。最上級職では上級職の更に2倍になる。そしてLvが1上がることに稼がなければならぬ経験値は約1.5倍になっていくのだが俺達3人はパー

テイーを組んでいる為、戦闘の貢献度によって多少の差はあるものの経験値はほぼ均等に割り振られる。なのでLv1だった俺はLv3だったミアのおよそ6分の1程度の速さでLvが上がっていくはずなのだが俺は未だにLvが1しか上がっていない。確かにゲームでは無くなった為Lvの上がる速度の定義は一概にどれくらいと言えるものではないが俺のLvの上がり方が遅々としているのは明白だった。なかなかLv1から抜け出せずにいた俺は酒場でLvが2になった事を確認できた時は余りにも嬉しくてシーナとミアが呆れるほどに喜んだほどだ。今回は俺がLv2になった祝いも兼ねてシーナにとつてもややLv帯の高い魔獣が跋扈するこの森までやってきたのだった。理由はこの森にいる『ブルオーク』という大型の豚人間からドロップするCランクの火属性の秘石狙いだ。既にここに来るまでの間に一つだけ手に入れていた。

ちなみに今回は一つ目巨人の集落の中に入る予定はない。一つ目巨人の集落にいる『サイクロプス』はAランクの秘石をドロップするのだが今のシーナとミアには少しLvが足りない。しかもこの一つ目巨人の集落にはボスモンスターの レッドアイ が居る可能性がある。レッドアイは見た目は殆どサイクロプスと変わらないのだが、名前の通り眼が赤く強さはサイクロプスの2倍ほどのステータスを持っているのだ。もしレッドアイに出会ってしまったら神の名を持つ装備の恩恵がある俺はともかくシーナとミアは瞬殺されてしまうだろう。

更に俺は未だに一度たりとも上級魔法を使用していない事を懸念していた。仮に俺の上級魔法の威力がレッドアイを一撃で屠れる程の威力があれば危険無く集落の中で狩ることも出来るのだが、今まで上級魔法を使用する機会すら無く、一度も使用した事がないのだからこればかりは何とも言えない。実のところ俺は、上級魔法を使う事が怖くなっていた。下級魔法ですら俺の予想をかなり上回る威力を持っていた為、上級魔法の威力を推し量ることが俺には出来ていなかったからだ。最悪仲間を巻き込んでしまう可能性を考えると安

易に使用できない。その思いが更に輪をかけて俺に上級魔法を使う事を躊躇させていた。

ここ1カ月に何度か感じてきた事なのだが、ゲームで俺がやってきた頃の戦闘と今俺が居るこの世界での実際に行く戦闘では、戦闘に対する意識が全く違っていった。戦闘自体、苦戦するわけでもなく今まで戦った魔獣はほぼ一撃で倒せる相手だったのだが、何よりも自分や仲間が命を賭けて危険と共に戦っている事が大きいのだろう。ゲームであれば当然のことながら、死んでも痛みもなければ恐怖もない。だがこの世界では全てが実戦であり、俺自身の痛みどころか仲間の痛みですら自分の痛みの様に辛く、恐怖を感じるのだ。確かにシーナもミアもこの1カ月でかなり強くはなった。だが戦いによる命の危険は少なからずどんな時でも存在する。まだ短い期間しか二人とは時間を共にしていないが、それでも俺にとって二人はかけがえのない存在になっている。たかが一月の期間でも3人で寝食を共にし、笑い、励まし、命を預け合えば嫌でも信頼は生まれるものだ。とにかく俺は戦闘では二人が危険に冒される事態が起こらない様に気を配っていた。

だがそれは思いもかけないタイミングで起こってしまった。

遭遇率が高いために一つ目巨人の集落の近くで俺達はブルオークとせつせと戦っていた。二人もブルオーク狩りに慣れてきた頃、5匹同時に遭遇したときのことだった。後方から来た3匹のブルオークは俺が引き受け集落側からきた2匹のブルオークの相手をシーナとミアに任せていた。

俺は気合と共に3匹のブルオークに斬りつけたが、さすがに一振りですべて止めを刺す事は出来なかった。2匹は仕留めたが1匹のブ

ルオークが逃げ出そうとした為、俺は ファイアボール の魔法を逃げようとしたブルオークに放つ。ファイアボール は相変わらぬの威力で背を向けたブルオークを焼き焦がし、絶命させるとともに幾許かのジユエルを地面に残し経験値の淡い光と共に霧散させた。俺が振り向くとシーナとミアは集落の方に逃げ出したブルオークを追っていた。1匹は問題なくミアの援護の元シーナが仕留めたがもう1匹を仕留め損なったらしくシーナは追っていた。

「深追いはダメです！」

とミアはシーナに叫びながらそれでも援護すべくシ彼女の後を追っていた。その時悲劇は起こってしまった。

手負いだったブルオークはシーナにすぐさま追いつかれ背を向けたままシーナの槍で一突きにされていた。少しの間ブルオークは抵抗するように自分を貫く槍から逃れようとジタバタしていたが、やがてグツタリするとそのまま霧散していった。シーナはそのままミアの方に向き向くと大丈夫だと言わんばかりにそのまま槍を掲げて見せた。だがその背後にある大木の陰から3mはあるうかと思われる赤目の巨人がぬうっと思いきや、シーナに向かつて大きな斧を薙ぎ払った。ミアは驚愕の表情でそれを見ていたが声すら出す事が出来ずにシーナに向かって何かを掴む様に手を伸ばしただけだった。シーナは咄嗟に盾を構えた為、斧に直撃こそしなかったものの、余りにも強い衝撃に耐えきれず、5m程吹き飛ばされ木に背中から直撃した。

ガハッと言う咳と共に真っ赤な鮮血を大量に吐き出し、盾は拉げそれを持つ腕はあらぬ方向に曲がっている。虚ろな目をしたシーナはミアに向かつて

「来るな……」

とだけ蚊の鳴くような声で言い、そのまま意識を手放してしまった。

「いやああああ〜あああ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

その光景を目にしたミリアの絶叫が森の中に響き渡った。ミリアはそのままがくがくと震える自身の足を叱咤し全力でシーナのもとに駆け寄る。そしてそのまま ヒール の魔法をかけ続けていた。俺は一瞬何が起こったか理解できず、呆然としながらただ見ていることしか出来なかった。

赤目の巨人はシーナとミリアの居る方向に向かって周り小さな木々を薙ぎ倒しながら近づいていく。ふと我に返った俺は正に神速ともいえる速度で赤目の巨人に向かって走りながら咆哮した。

「うおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

その声に反応したレッドアイは俺に向かって手に持っていた大きな斧を投擲する。俺は走りながら手に持った神剣で斧を全力で弾くとバリンとガラスが割れる様に斧は粉々に砕け散った。そのまま俺はレッドアイが立っている場所とシーナとミリアがいる場所の間に滑り込むように移動しレッドアイに正対する。そして俺は二人のいる後方に向かってSSランクの光魔法である ラピュチャフィールド を唱えた。二人のいる場所が半径2m程の光の円陣に包まれる。

この魔法は全ての事象を断絶する領域を生み出す魔法である。領域の内と外を全ての事象に於いて完全に隔離する。簡単に言うと安全地帯を作る魔法だ。そして俺はそのままレッドアイに向かって左手を突き出し続け様に魔法を唱えた。

「ヘルフレア！！！！」

9話

神騎士が世界を謳歌する

9話

シーナの前でパニックになっているミアを諭し、シーナの首筋に指を当て脈を取ってみたが、まだ体温はあるものの既に心肺は停止していた。心なしか顔色もどんどん悪くなっているようだ。こんな筈ではなかったと思いながらも俺はすぐに蘇生魔法 リバイブを使うべくシーナに掌を向け魔法を唱えようとしたときだった。

理由はわからないが背中にゾクリと冷たい物を感じ、咄嗟に振り向いたがそこに何かある筈も無く、あるのは涙でぐしゃぐしゃになった顔で此方を不安そうに見つめるミアだけだ。何故背中に冷たいものが走ったのか判らなかったがそれよりも、少しでも早くシーナを助けてやろうと俺は先程の違和感を頭の隅に追いやり魔法を唱えた。

「リバイブ ！！」

瞬間今まで感じたこと無いような強烈な痛みが俺の身体中を駆け巡った。俺は立っている事も出来ずその場に蹲ろうとしたが、それすらも許されず全身がひきつけを起こしたように硬直し動くことも出来ない。それどころか声すら上げる事も出来ず、全身の骨が折れた様な錯覚を感じながら気を失いかけたその時、シーナに向けて突き出した俺の掌から強烈な輝きを発する光の玉がシーナに向かってゆっくりと放たれた。放たれた瞬間俺は痛みから解放された。

光の玉はシーナの胸の中央辺りにゆっくりと吸い込まれると、シーナの身体から魔獣を倒したときに身体に入ってくるようなキラキラ

とした光が大量に放出され大気に霧散していく。その次の瞬間シーナがゆっくりと眼を開いた。

「私は……一体……???」

シーナは周りをきよろきよろと見ながら自分に起こったことが判らないでいる様だった。そんな様子のシーナに俺の後ろにいたミリアが飛び付く。

「シーナ!!!……良かった……本当に良かった……」

そのままミリアはシーナの胸に辺りに顔を埋め尚も泣きじゃくっていた。シーナが無事助かったことを確認すると俺はそのまま倒れ、意識を手放してしまった。

気が付くと俺はシーナに背負われていた。シーナは俺を背負いながらミリアと一緒に森を抜け、既にサーグスに向かう街道まで出ていた。運よく道中で魔物に襲われることも無くここまでこれたようだ。俺はシーナにもう大丈夫といって背中から降ろして貰い、ミリアとシーナに話を聞いた。

俺が気を失った後、ミリアは俺にヒールをかけようとしたがシーナに多量の魔力を使用していたため、既に魔力切れを起こしており立っているのもやっとな状態であった。何が起こったか判らないでいたシーナもミリアから詳しい事情を聞き、身体の奥のほうに違和感を感じながらも、3人の中では一番動く事が出来た為、俺を背負い警戒をしながら森を出てきたのだ。魔物と出会わなかったのは不幸中の幸いというしかない。この状態で魔物と遭遇していたら3人とも命が無かったに違いないだろう。

何はともあれ俺達3人はなんとか街までたどり着くことが出来た。

俺も先程の魔法を使用した後遺症なのか、身体中に強い疲労感を感じていた。気を抜くとまた気を失ってしまいそうな状態だった。ミリアとシーナも完全に疲労困憊な様子で3人で亡者のような雰囲気を出しながら、足を引き摺る様にして何とか宿屋に辿り着くことが出来た。

宿は混み合っていた為、俺達は3人で1つの部屋に泊まることになったが、そんなことは気にならない程疲労していた為文句も言わずに部屋に入った。俺はそのまま鎧も脱がず倒れこむようにベッドに横になり、そのまま眠ってしまった。

余りにも寝苦しかったかかった為目が覚めてしまった。腕時計を見ると深夜の3時だ。とりあえず鎧などを全部脱ぎ捨て身軽な格好になった。さすがにシーナもミリアもベッドで寝息を立てている。窓から外を見ると空には煌々と光る月が出ていた。

改めて今日、正確には昨日の出来事を思い出して、とんでもない一日だったな……と一人呟いてしまった。二人を危険な目に合わせてしまったどころか、シーナに至っては本来ならば取り返しの付かないことになっていたのだ。この世界が魔法のある世界で本当に良かったと心の底から思えた。もし魔法が無かったら、俺に力が無かったらと考えると改めてゾツとした。

もう二度と二人を危険な目に合わせることを無いよう俺はある決意をしてもう一度眠りに付こうとベッドに向かった。だが眼がさえてしまい、暫くの間二人の寝息を聞きながら眠れないでいた。それでも疲れは完全に抜けていなかったせい、知らぬうちに深い眠りに落ちていた。

「ミストさん！起きて下さい！！もうお昼ですよー！」

そう声を掛けながらミリアが俺を揺すっている。どうやら寝坊してしまっただけ。昨日感じていた身体の違和感は既に取れているが寝すぎてしまったため、なんとも気だるい寝起きだった。窓の外は既に日が高く昇ってしまっている。

俺は急いで身支度をしてミリアが用意してくれた朝昼の食事をいっぺんに済ますと早速3人で出掛ける事にした。話を聞くと実はミアもシーナも流石に疲れていたのか、いつもならこんな時間まで寝ていることは無いのだが俺が起きる1時間程前まで寝ていたらしい。俺が起きるまでの1時間の間、二人で昨日のことについて話し合ったようだ。話し合った詳しい内容については教えてもらえなかった。とりあえず俺達はこの町の酒場に向かうことにした。ここ1ヶ月、街にいる間は朝一番で酒場に行くことが日課になっていた。クエストを受ける為でもあるのだが、それよりも最初に酒場に行く理由はLvを確認するためだ。自分の強さや力を計るための指標が今のところLvしかない為でもあるのだが、そろそろミリアの転職できるLvも近づいてきているため最近特にこの日課を欠かさない様になっていた。

酒場に着くと、このマスターである髭を生やした老紳士風の男がいつもの様に無愛想に出迎えてくれた。あくまでも一度視線を此方にやるだけでそれ以上は声すら掛けてこない。だからこそ「無愛想な出迎え」である。

俺達は早速マスターに一声だけかけてLvを計るスフィアに手を翳す。まずはミリアがスフィアに手を翳すとLvは56と表示された。流石に昨日レッドアイの経験値がミリアにも加わっているため、かなりLvが上がっていた。小躍りしそうなほどミリアは喜んでいる。次はシーナだ。シーナがスフィアに手を翳して表示された数字は10。やはりゲームと同じように復活をした後はLvが下がってしまっただけ。所謂デスペナルティというやつだ。

10話

神騎士が世界を謳歌する

10話

「何故……??？」

ブリスト
神官であるミリアは俺の呟いた疑問の答えを知っていた。ミリアの説明ではこうだ。ゲームの中とは違い、この世界では リバイブの魔法は奇跡の魔法とされている。

確かに大神官や大司教といった高位の神官はこの魔法を使用することは出来るのだが リバイブ の魔法を行使することは多くの場合犠牲を伴うとの事だった。未熟なものが使用すれば行使した本人の命を脅かすことさえ稀ではないのだ。だから多くの者は リバイブ の魔法を好んで使おうとする筈も無く、成功例どころが使用例ですら極端に少ないらしい。そういった意味では俺が命を落とさず、Lvが下がっただけで済んだのはある意味僥倖と言えた。

その話を聞いて俺は少なからず背筋に冷たいものが走った。確かに良く考えれば安易に命を左右できるような力を一人の人間が持ち得る訳が無いのだ。この異世界はゲームとは違う。街にいる人々もそれぞれが意思を持ち、考え、生活し、愛するものを守るため、自身の未来や栄光のため、一人一人が精一杯に生きている。ゲームの中で同じ事しか話す事の出来ないNPCとは訳が違うのだ。

俺は心の底から自分の幸運に感謝した。今後恐らくはこの話を聞いてしまった以上、余程の事態が起こらない限り リバイブ の魔法を使用することは無いだろう。この話を一緒に聞いていたシーナの顔色も一気に蒼褪めてしまっていた。だが蒼褪めた顔のままシーナは俺と目が合うとゆっくりと口を開いた。

「ミスト、本当に済まなかった。そして感謝している……ありがとう。だがもし今後同じような事態が起こったとしても、リバイブの魔法を使うのは辞めて欲しい。この二度目の命を与えて貰った私はミストにこの恩を返せそうにない。」

そう言っただけで苦笑いし、俺が返答に困っているとシーナは俺の目を見つめ続けて言った。

「だからミスト、お前が望むなら私は出来る限りお前に協力する。お前が望むものは私は全て是とすることを誓おう。」

シーナがそう言い終わるとミリアも話し始めた。

「私もミストさんには本当に感謝しています。多分シーナがあんなま死んでいたら私は後を追っていたと思います。シーナは私にとって家族と同じなんです。」

いえ、今はたった一人の家族なんです。シーナが誓いを立てた以上、私もその誓いを立てましょう。」

そういって二人は凜とした表情で俺のほうを真っ直ぐ見つめて来た。二人がこんな事を言い出すとは全くの予想外だった。

「う……弱ったな……二人の気持ちは嬉しいけど感謝の気持ちだけ受け取っておくことにするよ。俺なんか誓いなんて立てる必要ないから。」

こう言っただけで俺は何だかんだ、俺がシーナを助けることになったのも本当に軽い気持ちだったんだ。だって、リバイブがそれほどの魔法だったことも今知ったんだから。そんなに感謝されちゃあ逆にこっちが恐縮しちゃうよ。……詳しいことは後で話すから取り敢えず場

所を移そう。こんな場所で話す内容じゃない様だしね。」

そう言つて周りを見回すと酒場にいた冒険者達は一斉に此方から目を逸らした。流石に話に入ってくることは無かったが周りの連中は俺達の会話に聞き耳を立てていたのだ。その雰囲気を感じた俺達はそそくさと酒場を後にした。話すにはどこがいいかと少しの間思案したが宿屋位しか思い付かなかったため俺達は先程来た道に戻ることにした。

宿に戻ると主人は俺達の顔を憶えていたらしく、どうされましたか？と聞かれたが俺は何でもないと答え、部屋を取る事が出来るか聞いた。流石にこの時間から部屋が埋まっていると言う事は無く昨晚と同じ3人部屋を取る事が出来た。部屋に3人が入ると、早速シーナが話し始める。

「ミスト、私達がお前に協力する事はお前にとって然程必要ないっていう事は判っている。だがどうしても私はお前に少しでも恩を返したいと思つている。迷惑かもしれないが私に出来る事はこれくらいしかない。」

シーナとミアは既に決意しているようだ。朝話し合っていたというのも恐らくはこの宣言をするための話し合いだったのだろう。

「シーナもミアもよく聞いてくれ。俺は単純に3人で旅をする事が楽しいと思つているんだ。仲間が傷ついたら助けるのは当然だろ？だから俺はシーナを助けた。それ以上でもそれ以下でも無いんだ。だからもし俺の願いを聞いてくれるというのなら、今まで通りで居てくれた方が俺は嬉しい。それに闘技大会まで協力するって約束したしね。」

俺は二人にそう言っただけで笑いかけた。

「ミストさんがそう言うのなら仕方ありませんね。これからも迷惑かける事があると思いますが宜しくお願いします。」

ミアは俺に向かってペコッと頭を下げた。シーナはまだ納得のいっていない様子だったがこれ以上言ってもしょうがないと思ったのだろう。

「そつだな。無理強いする事でもないか……だがこれだけは約束してくれ。リバイブは危険だ。あの魔法を使ってお前の命が無くなったら眼も当てられない。使うなというのはおこがましいかもしれないが、出来れば使って欲しくない。」

俺も出来る事ならリバイブはもう使いたくなかった。あの壮絶な痛みは正直耐えがたい。今回は運が良かったがそれこそ死んでしまふ可能性すらある。

「判った、約束するよ。その代わりと言ってはなんだけど一つだけ俺のわがままを聞いて欲しい。これから俺と一緒にある場所まで来て欲しいんだ。着いてくれば判ると思う。」

俺は昨日考えていた事を実行する事にした。それは二人に俺が出来る限りの最強装備を整えて貰うことだ。幸い秘石ならある程度は持っている。俺が秘石を出す事に二人は快く思わないだろうがこればかりは俺としても譲れない。

SSランクの秘石は余り持っていないので流石に今回使う気はないが、Sランクの秘石から装備を作れば二人の安全はある程度確保できるだろう。本当は二人が最上級職になったらSランクの秘石から

11話

神騎士が異世界を謳歌する

11話

Sランク以上の秘石を加工し装備を作るには3人で初めてクエストを受けた　フィストア　の北部の森の奥にある　ドワーフの護樹の麓まで行かなくてはならない。ドワーフであればSランク以上の秘石を加工する事が出来るのだが、人間と友好なドワーフが居る場所は　ドワーフの護樹　の麓しか詳しい場所を知らなかった。他にもいくつかあるらしいのだが、いつも　ドワーフの護樹　の麓を利用していた俺は他の場所の情報を持っていなかった。

取り敢えず　サীগス　の街の中心部にあるポータルから王都　フィストア　に移動する。ポータルの使用料金は5000ジュエルだ。サীগスの街の宿が一人部屋で一泊800ジュエルという事を考えると割高である。しかし徒歩で移動すると丸3日程かかるがポータルを使用すればものの数秒だ。単純に移動の際の滞在費やその他の経費などを考えると、ポータルを使用した方が安全且つ経済的なのである。

だがポータルを安価に使用するには条件がある。それはポータルを使用するパーティーのメンバーの誰かがAランク以上の時空間属性の秘石をポータルに寄与していなければならないのだ。寄与を行うとポータル優待チケットなるものが貰え、安価にポータルが使用できる様になる。ちなみにこのチケットは永続的に使用可能だ。

俺は既にゲームの時に優待チケットを手に入れてあったので何の問題もないが、チケットを持っていない一般の人達がポータルを使用する際は10倍の金額がかかる。流石に毎回払う金額としては大きすぎる金額である。

だがLvの低い冒険者や冒険者以外の者はAランク以上の秘石を手に入れる事が困難であり、更にはこの世界では秘石がゲームの時よりもレア度が高く、買おうとすれば値段も張る為ゲームの頃よりは10倍という金額も妥当だと思えた。

俺達三人はフィストアの街のポータルを出るとそのままの足でドワーフの護樹の麓に向かった。この時はまだミリアにもシーナにも行き先と目的を告げていなかった為、街の外に出るときは何やら訝しげな様子で頻りにどこへ向かうのか俺に聞いてきた。俺は二人はまだ行つた事がないかもしれない所だが、間違いなく二人にとつても必要な場所だと言う事を伝え、詳しい内容については着いたら詳しく説明するとだけ言つて内緒にしていた。折角だから驚かしてやろうと心に決めていたのだ。

ドワーフの護樹までの道中、何度かワーウルフと遭遇し戦闘になったが、一月前と比べると大分戦闘にも慣れ、肉体的にも精神的にも強くなつていた俺達3人は苦戦などする筈もなく麓に到着する事が出来た。

目の前には見た事もないような大木が悠然と聳え立っていた。余りの大きさに神々しささえ感じる。幹の太さは目測で直径20メートル程あるだろうか。高さは木の余りの大きさの為麓からでは計り知る事が出来ないほどだ。太陽から降り注ぐ強い日差しもドワーフの護樹の麓では天を覆い尽くさんばかりの枝葉によって淡い木漏れとなつている。

そんなドワーフの護樹をぐるりと囲むように小さな集落が形成されていた。建物は人間が住むものと比べると一回り小さい。建物の中からは金属を加工するような、カンカンといった音が聞こえ煙突からは真っ白な煙が立ち上っている。

その建物の周りでは身長が1mもない、ずんぐりむつくりとして髭を蓄えた、いかにも【ドワーフ】といった出で立ちの者達が手に金属の塊や見たことない武器や鎧などを抱えて何人も忙しそうに走り回っている。その中にはドワーフの女性や子供と思われる者もあり、その身長では考えられない程の重そうな大きな荷物を担いでいる者もいた。

ドワーフばかりではなく冒険者もちらほらと見受けられる。俺達と同じようにドワーフに秘石の加工をしてもらう為にここへやって来た者達だろう。数人のグループで来ている者もいれば一人で来ている者もいる。真新しい武器を掲げて嬉しそうに眺めている者もいた。ミアアとシーナはここへ来たのは初めてらしい。二人はうきうきした様子で周りの様子を見ていた。特にシーナはドワーフや周りの人達が持っている武器や防具を見て、レアな装備だと言う事が判るらしく、より一層気分を高揚させていた。

俺達三人は早速秘石を加工してくれるドワーフのもとへ向かった。そのドワーフが居る場所は ドワーフの護樹 の一番近くにあり、この集落のほぼ中央だ。周りの建物と比べて2回りほど大きな建物で、中に入ると所狭しと武器や防具が陳列されている。中には明らかに呪われているのではないかと思われるような禍々しい造形の盾や、どんな大男が使うのかと思う様な巨大な大剣等が雑多に並べられている。

シーナは我を忘れて大小様々な武器や防具に魅入られたかのようにゆっくりと近づいていき、まるで少女がウエディングドレスを見ているかのようなキラキラとした目でそれらを見ていた。

ミアアに言わせるとシーナは所謂武器マニアらしい。その中でも自分が使用している槍については事の他詳しい様だ。今も槍が陳列されている場所の前で真剣な眼差しで唸っている。そういうミアアも何か見つけたらしく異様にそわそわしていた。どうやら目の前にある神官用の杖に心魅かれている様だ。

そんな二人を見て俺は嬉しく思った。ここに来た甲斐があるというものだ。だが今回はここに陳列されているものを買うつもりはない。何故なら秘石から加工して作成した武器や防具は自分の『銘』を入れる事が出来るからだ。

本来『銘』というものは作成者の名が彫り込んであるものを指すのだが、この世界での『銘』はその武器が自分専用のものである事を指す。当然ながら俺の装備も『銘』が入っている。『銘』が入っている装備品は『銘』が入っている本人しか装備する事が出来ないのだ。もし『銘』が入っている装備品を本人以外の者が装備すると、10分の1以下の性能に落ちてしまう。この仕様は装備品をマーケットで転売できなくするためのMMO故のものであるのだが、何故かこの異世界でも適用されていた。

この異世界で装備に『銘』が入っていることの利点は、装備を盗まれる心配が少なくなる事がまず一つ。そしてもう一つ、これが一番重要なのだが『銘』の入った装備は自分の身体に適応するようになるのだ。

目の前に居るドワーフも言っているが『銘』を入れる事は装備に命を吹き込む事であるらしい。自分の魔力を装備品に溶け込ませることで『銘』は入れられるのだが、それによって『銘』を入れた者を装備品が認識し、仕様者の身体つきに併せて装備が変形するのだ。

これが『銘』を入れた者以外は装備する事が出来なくなる最大の理由である。

1ミリ単位で『銘』を入れた者の体型に完全に変化するため、使用者にとっては最大限の使用感を齎し、それ以外の者にとっては下手をすれば物理的に装備すらできないのだ。

ちなみに『銘』を入れる事の出来る装備品はSランク以上の秘石から加工した装備品に限られる。である為、今俺達の目の前に並んでいる装備品は全てAランク以下の秘石から作られたものであり、これらはすべて量産品と同じだ。専用に作られたものではない。

12話

神騎士が異世界を謳歌する

12話

「ところでシーナとミリアはどんな装備が欲しいんだ？」

俺がそう聞くとシーナが飛びつかんばかりの勢いで言った。

「もう欲しい装備は決まってるんだ！長年の夢だった『銘』付の装備をこんなに早く揃える事が出来るなんて夢にも思わなかったよ。本当に私達はミストに世話になっただけだからだ。」

このままではこれまでに受けた恩を全て返すのは大分先の話になってしまいがミストはそれでもいいのか？」

シーナは表情を面白いくらいに次々と変化させながら答え、それでも嬉しそうにしていた。夢とまで言わせるほどに欲しい装備がシーナにはある様だ。俺はシーナ達が喜んでくれるならそれでいいよとだけ答えておいた。どんな場合であれ人にプレゼントを贈って喜ばれるのは嬉しいものだ。

シーナとは対照的にミリアは顎に手を当て必死に頭を悩ましていた。

「……私はまだ決まって無いです。『銘』の入った装備なんて今まで想像した事もなかったの……。正直なところどんな装備を作る事が出来るのかでさえちゃんと判ってないんですよ。どうしまし
ようか？」

本当に困った様子でミリアはうんうん唸って考えていた。

「どうしましょうかって言われてもなあ……ミリアは神官だし、これからいろんな回復魔法や補助魔法なんかを使っていくだろうから、回復魔法の多い光属性の装備で揃えたらいいんじゃないか？」

俺がそう答えるとシーナも付け加える様にミリアにアドバイスをする。

「私もその案に賛成だ。私は闇属性の装備で揃えようかと考えているんだ。光と闇属性は他の4属性に比べてバランスがいいからな。それに全ての装備の属性を揃えるとその属性の特有効果が付加するらしい」

その話を俺達の後方で聞いていたドワーフのおじさんもうんうんと頷いている。

ちなみに各属性ごとの特有効果を説明すると、火は攻撃属性付与。通常の攻撃に火の属性が付与される。Sクラスの秘石では単純に物理攻撃力が1.5倍程になる。ただし火と水の属性の魔獣に対しては攻撃力が半減してしまう。

水は自然回復力の増強。土は腕力増強、風は敏捷増強、光は魔力増強、闇は体力増強のはずだ。少なくともゲームではそうだった。

「では私は光の装備一式にしようと思います。ミストさん、それでいいですか？」

ミリアはまだ若干迷っているようだがシーナの薦めもあり、ほぼ光属性装備一式で決まったようだ。シーナは相変わらずニコニコしながらこれから作成する装備に思いを馳せている。

「じゃあ早速装備の作成をお願いしよう」

俺は腰の袋から光と闇のSランクの秘石をそれぞれ6個つつ取り出し、俺たちの後ろに控えていたドワーフの職人に渡した。

「じゃあこれで二人の装備の作成をお願いします。俺は先に宿に行ってるから、二人は職人さんと作成する装備について話し合うといいよ。採寸なんかもしなくちゃいけないだろうしね。スリーサイズを俺に知られてもいいなら残るけど?」

「「!!!!!!」」

二人とも顔を真っ赤にして見事に絶句していた。ミアアは俯いて何やらぶつぶつと言い、シーナは何か言いたげに口をパクパクさせていたが、何か言われる前にさっさと退散することにした。

「じゃあ後は宜しくお願いします」

「おう。任せておけ。嬢ちゃん達に飛びっきりの装備をこしらえてやるよ。Sランクの装備を作るなんて久しぶりだしな。腕が鳴るよ」

とびっきりのいい笑顔でがはと豪快に笑っているドワーフの職人に後はすべて任せることにして、二人を残し俺はさっさと工房を後にした。

(さて、これからはしばらく時間があるけど、どうするかな……)

工房を後にしたのはいいが、俺は特に予定があるわけではなかった。ぶらぶらと周りを見渡しながら宿のほうに向かって歩いている

と、後方からドタドタと盛大な足音が聞こえてきた。俺は咄嗟に振り向くが目の前には誰もいない。

「下じゃー下！ー！」

下方に目を向けるとそこには年老いて白髭を蓄えているドワーフが俺を見上げている。

「俺になんか用でも？」

俺がそう聞くとドワーフのじいさんは俺の顔は見ずに腰辺りを見ながら、わなわなと震えて腰に佩いている剣を指差しながら言った。

「つかぬ事を聞くがの、冒険者殿。あなたの腰にあるその剣はもしかしてあれかね？……あの『草薙の剣』かね？」

「よく知ってるね、じいさん。この剣は『天羽々斬』とも呼ばれている『草薙の剣』で間違いないよ」

俺がそう答えるとドワーフの爺さんは突然平伏して土下座の姿勢になった。

「冒険者殿。いきなりこんな事を言われれば迷惑であることを承知でお願い申し上げます。この老いばれにその剣を鍛えさせてもらえはせぬか？わしは生涯をかけてその剣を探しておった。300年もの間ずっとじゃ。」

ドワーフの老人はその身体のどこから出たのかと思えるような大声でそう言い、顔を上げた瞬間に滝のような涙を零しながら必死に俺に懇願した。

「……詳しい話聞かせて貰ってもいいですか？」

俺とドワーフのじいさんはじいさんの家であるこじんまりとしているが実に立派な工房に移動して話を聞くことにした。詳しい話の顛末はこうだ。

『草薙の剣』

この集落のドワーフに代々伝わる伝説の剣。

神々の時代にスサノオがイザナギから譲り受けたとされる八つ首の竜を屠った剣。

その剣は英雄と共に姿を現し、そして英雄と共に消えていくと言われている。

その剣を鍛えた者は鍛冶の最高の喜びを知るといふ。

爺さんは『草薙の剣』を見たことは無かったのだが感じた（……）のだそうだ。俺のこの剣が『草薙の剣』であるということ。そしてその直感は見事の中した。

この剣の見た目は、鞘や柄を含めけっして見事とは言いがたい剣だ。禍々しいまでの威圧感と切れ味を持つてはいるが、古めかしく金属にある筈の光沢も薄らとしかみえない。一見みすばらしくもあるのだが、それでもこの目の前の老人はこの剣の本質を見抜いた。

老人は見た瞬間に雷に打たれたような衝撃を感じたらしい。この剣を鍛えるのは自分しかないと思ってしまった（……）。そして自分の全てを投げだしてもこの剣は自分が鍛えなければいけないと思ってしまったのだと言う。

俺は最初迷っていたが、爺さんの熱意に負けてしまった。剣の切れ味を損ねてしまうのではという懸念もあったため、正直この剣に手を入れることはしたくなかったのだが、爺さんの話ではこの剣はま

13話

神騎士が異世界を謳歌する

13話

宿に向かって歩いてしていると不意に携帯が鳴りだした。
秘石で出来た液晶には「ミリア」の文字が浮かび上がっている。

「（ミストさん？今どちらにいますか？

私たちは装備の採寸などが終わって宿を探しているところです。
まだ宿はとってないですよね？」

ミリアは幾分弾んだ声で電話（？）越しに話している。

「ああ。まだ宿はとっていないな。俺も今宿のある方に歩いている
んだが、今どのあたりだ？シーナも一緒か？」

「（はい。隣にいますよ。今は丁度酒場の前辺りにいます。酒場の
2階の宿は空いているようなんですがどうしますか？）」

「そこで構わないから3日ほど部屋を確保して貰えるか？
俺の方でも色々あって3日ほどこの街に滞在しなければならなくな
った。」

「（あ、ミストさんごつちですー！）」

50mほど先で手を振るミリアの姿が見えた。隣でシーナも手を挙
げてこちらに合図している。

俺も軽く手を挙げて答え二人に合流した。

「実はドワーフの爺さんに捕まってしまって。この通り佩いていた剣も爺さんに取り上げられてしまったよ。何やら昔から俺の剣を探していたらしくてな。どうしても鍛えたいと懇願されて渡してしまった。

丸腰で歩くのはどうも気分がソワソワするよ。」

そう言いながら俺は二人に自分の腰の辺りを指し示して丸腰であることを見せた。

「ミストは剣がなくても魔法があるから十分じゃないか。ミストの実力を知っている私としては、とてもじゃないが今のミストにでも喧嘩を売る気にはならないな。」

シーナはそういうとミリアと頷きあっていた。

しばらく歩くと宿兼酒場である、大樹の止まり木くに到着した。早速3人で中に入ると既に酒場は様々な格好をした冒険者達で賑わっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8095/>

神騎士が異世界を謳歌する

2011年3月25日17時26分発行